

しん報

第 2 号

昭和 33.10.1

兵庫県
安栗郡山崎町
教育委員会内
安栗郷土研究会
電話 23 番
(印刷・谷印刷)

四睡庵素練 (一)

一、はしがき

島 田 清

安栗郷土研究会の会誌も頃調に第二号を発行することとなりまことよろこばしい。

先日、安井俊二氏より、八月中旬に第二号の原稿を送るようという手紙が届き、しかも、四睡庵素練のことを書いてもらったらどうだろう、ということも書き添えてあった。

私は、山崎在任時代、素練のことを或る程度調査したことがあり、安井氏がそれを知っていられるので、こうした注文となつたのだろうが、実のところ、この俳人のことは、もつと注意しておく必要があると思う。というのは、松尾芭蕉の樹立した正風俳諧が、歿後にだんだん傾落し、遂に与謝蕪村一派の俳壇革新運動となつた際、同じ道を志向して活動した人であり、江戸時代の安栗俳諧史上においても、黄金時代を現出させた人だからである。活動範囲が安栗郡内に限られていたことや、青蓮寺の納所をあずかる僧侶の身であったこと、或は、俳諧史という特殊な部門のうちだけで活動した、というようなことが重なり

あって、この人のことを知る人が殆んどなく、中央で出された俳諧史の書物をひもひもといってみても、また、『安栗郡誌』のように地方で出版された書物を調べてみても、全く記載されていないのは、なんといつても惜しまれる。安井氏の注文も、おそらくこうしたところから出たことであらうし、私も、そうしたことの必要を痛切に感ずる。それで、これから、素練のことを述べてみることにしよう。

二、安栗俳諧史の初見

一体、安栗郡の俳諧は、いつごろから始まるのであろうか。いままでのところ、こうした問題を研究した人はいないようであるが、私は、貞門時代や談林時代から始まるのではないかと想像している。この時代の山崎が、名君池田恒元をいたゞいて平和を楽しんでいたことや、城下が繁栄していたありさまを考える場合、また、参勤交代などによつて江戸や上方の文化がかなり早く受け入れられたのではないかと考える場合、この地に幾人かの俳人ぐらゐあつてもさしつかえないのではないかと思う。

播磨の主邑である姫路において、この時代に、内山一才、池田是誰、といった名高い俳人が出、多くの作品を発表しているのを見るならば、山崎にその風が及んでいないと誰が断言できるだろうか。この時代の俳事が、作者の住所などをこまかく書くところへ行つていない為に、詳細なことはわからないけれども、今後、充分注意しておく必要があることであらう。

その後、芭蕉が出て、正風を樹立することになると、姫路に井上千山が出、元漕、厚風、菰州などとともに活潑な活動を開始した。また、このころ、俳人の行脚がさかんになり、元禄十四年には芭蕉

の門弟、広瀬惟然が、井上千山と共に、新宮、作用より杉坂峠を越して作州へ旅行し、(この時の作品を集めて惟然は『二葉集』を編み、千山は『花の雲』を編んだ) 享保に入つては、露川、慈説の二人が同じ道を歩いている。(この時の收穫が、『西国曲』である) どちらも、山崎へまでは足をのばしてないし、このほかに、山崎を訪れたという俳人も見えないから上方にひろがった薫風俳諧が、どこまで山崎に及んだかは、なお、向題があるけれども、こうした傾向や風潮が、おそかれ早かれ、近隣の地方に影響して行くことは当然の事であるから私は山崎にも、或る程度の俳人がいたのではないかと思う。今後、具体的な資料を捜索して、何とか実証したいものである。(未完)

史料採訪報告

山崎高校 宇野正 瑛

夏休暇を利用して、私の研究テーマの鉄山業に關する史料を中心として探索を行いました。少ないながらも探せばまだ各地にいろいろの史料が残っているものです。

すでに、散逸の才前にあつて、ほんとうに今日訪ねて良かったとの思いを深くしたこともあり、又郡内に住んでいるわれわ

れが知らぬ間に、遠い地方から、わざわざ訪れて研究して行った人達の話を聞かされ、ほんやりしては居られぬぞと云う感も致しました。

お互に協力して、隅々まで一度計画的な採集の必要を痛感して居ります。

以下、その時に得た鉄山史料以外の二、三を報告して見ます。研究者の便宜ともなれば幸甚です。

〈一〉 木地屋関係のもの

郡北には、小掠姓を名乗る嘗つての木地屋の人々が多く、農業に転換して古の技術も忘れ、伝承すら忘れつつありますが、現在の処、木地屋の巻物等が四ヶ所(一ヶ所は未調査)に残つて居り、木地の道具ヤ、ロクロも、失われかけていますが、まだ、二三ヶ所に所持していられます。

殊に、すでに古く定着して農業に転換したことを示す史料や鉄山稼行中の山中での、木地職との関係を示すものなど、興味深いものもあり、現在、郡内唯一と思われる杓子を製造している人も、八十二才の高令ながら、元気で仕事をしています。

なお、寛政九年に建築したことの証明出来る記録と共に、百六十年を経た民家もありました。

〈二〉 葦材関係のもの

極く狭い範囲しか報告出来ないのが残念ですが、計画的に探索の手を延ばせば、まだくあると思えます。

◇波賀町野尻部落では、部落の郷蔵に、多数の史料が見られました。

- ① 年貢可納割附之事へ納税令書といふべきか） 寛政十二年、文政旧、五と文久三年迄、二十七通
 - ② 年貢皆済目録（納税の時の目録）文化、文政より、明治十年迄、二十三通
 - ③ 田畑高反別位銀并名前取調下帳
 - ④ 播広尖栗郡野尻村新旧換地帳
 - ⑤ 五人組連判御仕置帳
 - ⑥ 板仰渡御請証文
 - ⑦ 播広口尖栗郡野尻村高反別帳
 - ⑧ 野尻村田畑高名寄帳
 - ⑨ 田方新田内見合附帳
 - ⑩ 播広口尖栗郡野尻村高反別小前帳
 - ⑪ 宗門改帳
- 其他

◇波賀町皆木村（古野弥右工門氏所蔵）には、前出の、年貢可納割付延亨以後多数、年貢皆済目録明和以後多数、飯見材明細帳、近志神社附係の記録多数、

- ◇波賀町齊木村（根谷種一氏所蔵） 御年貢可納割付数種
- ◇波賀町名古城岡田充平氏所蔵の文書多数
- ◇千種村西河内平瀬辰夫氏所蔵の文書多数

X X X X X X

尚又、姫路市網干区に加藤家は、尖栗郡の農産物を一手に扱った向屋で、出石にあった竜野屋、鳩屋などと取引関係があり、タンスに、おびたゞしい文書、記録を保存せられており、妻席の辰己屋にも、鳩屋との取引を示す古記録を所蔵されております。郡北に、お盆の時の囃りとして有名な、チャンチャコ踊は、但馬にその同系のももありますが、鳥阪市越路、桂木、船岡町見槻、郡家町宮谷等にも、同系統のものあり、因・但・播の文化交流を考えるにも、興味深いものと思えます。

（採訪中、いろいろ便宜を供与せられた各位に感謝致します。）

言が物味



阪東の肉

中興通商店街
電話 四五七番

河東上儀説(一)

栗山宗知

山崎町河東地区神谷部落に、楠氏一族の墓と言いつてえられてゐる五輪の塔と一つ石に仏像を刻んだ墓とがある。

五輪様の方は、高さ一尺八寸、仏を刻んだ墓は一尺五寸五分である。墓石は普通小供の墓のようでありながら、変つてゐるのは其の台石が墓と一つ石であることである。人物が刻んである部分は五尺五寸で、何仏か不明である。台石の下約七寸は自然石のまま尖つていて、土中に埋めなければ建まられない。時代は分明せぬが、四五百年以前のもものと思われ。

此墓は、神谷元庄屋をつとめていた釜田栄太郎翁の宅地内にあつたが、三十余年前に現在の墓地に移転したものである。翁へ現在八十才の話では、同氏幼少の頃祖母より聞いたのでは、墓前に約二十坪程の空地あり、毎年春秋二回お祭りをして部落民が集り、老若男女が揃つて現在の金踊りのような踊をなし、近村より沢山の参詣人があつた由、しかし祖母が二十才頃からお祭をせぬようになったとのことである。楠氏ゆかりの墓に対する伝説として、神谷村は部落

を北、中、立花の組に分けて、一般に北、中、南といふのを、南といわず、立花組と言うのは立花は楠氏の姓である橋に通じてゐるのであるとも伝えられてゐる。

篠の丸公園の由来

入江 静夫

篠の丸公園は最上山より八幡神社に亘る一帯を総称して篠の丸公園と称されてゐる。篠の丸というのは貞和年間、赤松則祐が築いた篠の丸城より取つたもので、辺鄙の地として放棄されてゐたのを明治十二年に志水平一郎、志波善太郎氏等により尼ヶ鼻に薬師菩薩を安置して最上堂と名付け、経路を改修し境内を拡張して公園の形を造つた。尚昭和十年より二ヶ年の間に木村説二氏の篤志により、山林に道路を新設し、観音樹を植へ休憩場を設備し公園化して、篠の丸公園と名付けたものである。

村上町長は最上山の一部に各種の樹木を植へ森林公園として育成するため毎年各種の樹木を植えておられ、本町と商工会が桜を植へて美化を図つてゐる。

最上山、経王堂、児童遊園地、篠の丸城址、植尾神社、八幡神社、忠比酒神社、妙見堂を含む篠の丸公園は年々美化育成されるので将来は立派な公園とな

る事でしょう。

一宮町の虚空蔵大菩薩堂

赤松園琳

一宮町（染内地区）下野田に二十畳敷もあるとい
う笠の如き形に似た大岩石があつて、この下の立場に
建っている堂宇に虚空蔵大菩薩が安置してある。

伝えるところによると播磨国一の宮伊和神社より十
八丁、丑寅の方に奉祀する虚空蔵大菩薩は人皇四十五
代聖武天皇の御代、神龜五年に僧行基の開基されたも
のをいい、国に一佛一体の御佛像にして国内福利、現
世安全を守り給う菩薩にて、僧行基の一刀三礼の作と
伝えられ国宝級のものだとも言われている文化財であ
る。室町時代の頃、一の宮岡城山の城主赤松家の信
仰が厚かった。

毎年旧二月初午の祭日は郡北一円より参詣者が多く
当山の太岩の下は空洞になつており狭い所では一米四
方ほどしかない法暗い此の穴を無事にくぐれば一年中
安泰であるという昔からの風習があるので、参詣者は
空洞内で岩に頭を触れないように注意しながらくぐ
つて無病息災を祈念している。

尚又近くに虚空蔵大菩薩の守護の寺といわれている

古義真言宗の松寿山西林寺という古刹がある。

松寿山西林寺は安泉郡一宮町下野田字中垣内に在る
古刹にして堂宇は山によりかゝり眺望甚だ佳である。

当寺は古義真言宗高野派に属し本尊は十一面観世音
にして僧行基の作と称せられている。創立年代は不詳
であるが伝え言う人皇四十五代聖武天皇の御代、神龜
五年行基菩薩の開基といわれている。

近年まで安泉郡に属していた現今の佐用郡南光町船
越に在る真言宗高野派松越山瑞晴寺が神龜五年二月僧
行基の開基と伝えられ、本尊薬師如來は行基の作とも
いわれており、天平三筆三月、瑞晴寺の工事は落成し
た。

また一宮町下野田に在る虚空蔵大菩薩が、神龜五年
僧行基の開基にして、本尊は行基作とも称せられてい
る。

これらとの關係が古来より最も深甚であるのと、且

文具
事務用品
伊藤文具

TEL・126

つ又西林寺の本尊観世音菩薩が行基作という伝説があるのを思い考うれば、松寿山西林寺も虚空蔵大菩薩と同時に、神龜・天平年間、僧行基の開基と推せられるのである。

西林寺は虚空蔵大菩薩の守護の寺といわれ、また室町時代の頃は、播磨国一の宮の宮山、岡城主赤松家の祈願所であったと伝えられている。

史料「兵粟人名鑑」(一)

(一) 宇野祐光 赤松 円谷

祐光は、兵粟郡広瀬庄杉ヶ瀬橋居の領主宇野日向守祐久の嫡男(註) 諸本には宇野政頼の従弟のように作つてあるが、曾根研三著伊和神社史の研究には、政頼の甥宇野祐光とある。(註) 元龜、天正年間兵粟郡土万郷塩野村鳥子城主であった。(註) 現今の山崎町塩山に鳥子城跡がある。また「兵粟兵粟郡誌」に「兵粟」に長水合戦の時、杉ヶ瀬橋居に住したとある。祐光は宇野右衛門督と称し長水城宇野家随一の器量人であったといわれている。「兵粟郡古城址」には長水城の城代家老であったとある。天正八年長水合戦に羽柴秀吉と戦い敗れ五月九日兵粟郡千草庄千草村に於て主君宇野政頼、祐

いつでも・どこへでも

山交ハイヤー

でんわ
166

安全・親切

清父子に殉死した。時に行年三十八才。寂靜院殿花林泉祐大居士と諡した。菩提所は塩野村真言宗赤松山大福寺であった。また宇野家の菩提所旧跡、千草宇大寺に墳墓がある。

(二) 前野真門

前野真門は初諱本平、通称を佐兵衛と称す。真門は号である。山崎町前村の人で、「観玉集」「青監集」などには「八木真門」と書いてある。

文化八年六月二十四日に生れ、歌道を因幡の飯田秀雄、姫路の秋元安民に学んだ。

書に巧であったので明治維新後は家禄六石を賜つて山崎藩民筆属史をつとめていた。

其の後、癡癡に逢つて近郷二十ヶ村の公文書筆耕を業とした。晩年自作の歌を集めて「柏園集」と名づけている。名吟が甚だ多い。樽井守城、稻岡秋平と並び称せられて和道三秀の一人であった。明孝九年四月

二十八日六十六才で病死した。

「辞世」 人といふ人に待たれてをしまれて

さきらるものは桜なりけり

郷土史料解説 (二)

安井俊二

安栗郡守令交代記

片岡醇徳が元禄十二年(一六九九年)に着わした本で、長らく写本で伝わっていたところ、昭和十九年島田清氏の校訂本が本会から発行された。孔版で部数も少かったのは戦時中のことであるから仕方がなかった。

内容は、建武軍向新田義貞播磨国を領したときから延宝七年本多政貞(後忠英)入府後元禄時代まで代々の領主とその施政ぶりを詳細に記述している。この書は郷土研究書としては相当高く評価されるべきで「長水軍記」などのいわゆる読物的フィクションの多い物語ものと同じ視することはできない。

醇徳の父は、山崎町が初めて城下町となった元和年間から町年寄役をつとめ、そのあとをついだ醇徳も長年町年寄役に選ばれ、つづさに領主変遷と町の盛衰を身をもって経験している。現在調査してはこんな正確な記録は不可能であろう。この点徳川初期の郡史として絶大の価値を持っている。

兵庫県安栗郡誌

大正十二年三月発行 菊版クロ

一ス装、郡制廃止記念出版ともいふべきもので、時の郡役所(現在は安栗寮)となっている場所の書記の方々の努力になったものである。この印刷された分厚い本が、現在では中々手軽に目に入らないから妙である。すでに珍本の部類に入っている。宝永五年の醇徳が書いた「安栗郡誌」以来二百十五年目の郡誌である。播磨風土記もとり入れ新史料を加えて本郡を知る資料として欠くことのできない本である。内容は面積人口から山川気候、町村沿革、教育、物産、主要神社仏閣まである。教育については、維新前と維新後にかけて記述してあるが中々参考となることが多い。郡治についても同じ分け方がしてあるが、維新前の方が面白い。この部分は手軽な郡史としての価値も充分に備えているから一読して頂きたい本である。

サン薬局

鴻巣町
電話五四五

永孝林記

永孝林は播州兵部郡五十波村にある。郡人片岡醇徳の母を葬ったところである。初め醇徳若くして父を失い、悲み甚だしく死ぬ程嘆いた。しかるに五患を避くる葬法を知らないので、俗に従つて近村の河決に葬つた。いくばくもなく河水氾濫してその墳墓を流したので醇徳は哀みにたえ不気鬱して（神経衰弱）京都に來り病を養うた。療養中にたまたま本屋で三徳書、香鏡書等を見つけてこれを読み、初めて四書の名あることを知り、四書を求めてこれを読んだ。その後聖賢の道を尊信して日夜勉学を怠らず、かつての学問のなかつた頃に父の墳墓を水難にかけた慘状を大いに悔いて夢にも忘れられなかつた。そこで母の爲にあらかじめ葬地を扱ばんと思ひ、帰郷する度に暇あらば山野を巡見して地をえらび、南の比地村で山林一区を買い万一の時の用意とした。しかしその行く路が屈曲して狭く民家と大變隔つて戸を安んずる所でない。そこで又相似た一区を東の神谷村で買った。ところが日ならず部落の保甲伍首（村の世話人）が交代して、新しい者は信頼がおけない。別に良地を探さねばならない。母は先令の爲、いつ急に死ぬやもはかり難いので急を要す

ることである。そこで北の五十波村で林麓一区を買つて葬地にした。この地は西北山に囲まれて草木茂盛、東南は田圃開けて川が流れ、土肥え風景が非常によい。村人はその志を感じて道路を改修した。

後元禄六年六月二日に至り、その母九十有五才天壽をもつて終つた。醇徳は子克文と吉礼にしたがつて葬つた。葬具には出来る限りの方をつくれ、墳を築き礎を立て垣をめぐらした。楊齋先生これを書いて、永孝林と名づけられた。醇徳は新に父の墓を作らうと思つたが、体魄がないのに魂を招いて葬るのは礼でないとして止めた。

後十余年、郡主森村馬守がその領地を巡視するとき墓は見たくないから路傍に露出させまいやうにと令を下した。ところが永孝林は、路の左にはつきり望まれる。醇徳は驚き慌てて鋸等をもつて一時の容をまぬがれた。しかし他日屋移り年交つて、取つぱれの難が、又は收地になるかも知れないと深く心配して嘆いた。郡主は之を聞いて、親を自分の買つた地に葬ることは当然で察することはない。然しさように心配するのは孝心が深い爲である。母の年九十有五になるのは安養のしるしである。且つその身学問を好み、実行を尊ぶこと感賞にたえない。よつて状を作り永孝林境内を賜い、またその地の諸役を免れられた。このときは室永

二年中冬十八日であった。

予曰く、昔は嶺信「高敞之地、郭璞卜暨陽之田」を嘗んだのは皆母の爲であった。然しその葬礼の如何を知らなかつた。孟子曰く「養生者不足、以当大葬、推送死、可也、以当大葬」。いま醇徳は母の生前はよく色養し、死すると葬地をえらんで古礼にしたがい、遂に郡主の特恵を受けた。千載親の体魄を地下に安んじしめたことは孝というべきである。楊斎先生名付くるに永孝という。其旨はまた深い。子孫たるものはよく思いみつべきである。生事葬祭は礼によるのが孝である。しかしその身を修めなければ家とのわす、家とのわなげれば先祖もどうして安んずるのであるか。身を行は正直を旨とし、人を待つに慈愛を本とし、常に孝弟忠信廉を存して和睦の凡あり。しかして倣優驕惰粗暴乖戾の態度がなければ一家礼義で業を治め、勤儉で先祖の心を心として永く家を保つのが永孝というべきである。もし放逸怠惰で家を保つことができず、祭礼は廃絶し墳墓が荒廃しては大きな不孝である。子孫である者これをおぼわなければならぬ。

宝永丁亥孟秋中泮

阿陽 増田謙之 謹記

②この文は宝永四年（一七〇七年）秋に書かれたもので、醇徳死亡の二年前である。増田謙之は中村楊斎の門下、

醇徳の学友である。母の死後十四年目にできたことによる。原文は漢字ばかりで、とりつき難いので便宜現代文に訳して掲げた。原文は五十波片岡家に所蔵されている。（文貴・安井）

本会視察旅行の思い出

山崎教育委員会 福井政男

六月八日会員の古文北財視察旅行にお供いたしました時の思い出を書いてみます。

この企画は早春以来の念願で、時期が暮業期を控え梅雨期となりましてので参加人員の不足を心配しておりましたが、運よく天候に恵まれ、当日の朝になって五十五人乗りのバスでは乗りきれず、七十人乗りに変えて頂き、六十九人が乗り込んで堂々と出発しました。運転士は小林正佳君、車掌は永富あけみちゃん。姫路

洋品雑貨

神姫前

福

ともざわ

医薬品玩具

TEL. 146

清酒

老松

造酒松老
醸社有限

で鳥田清先生が一行に加って下さって、先づ姫路城の説明から姫路の陸橋の説明まで、御着へ着くまで説明は続いた。私たちが知らなかつた新しい智識が養われて本当に嬉しかった。さて御着についてからは、午堂山国分寺へ行つた。まさに荒廃せんとするこの寺の中に収められた秘伝、五輪塔、墓石建て方は申すまでもなく、その昔かつて金殿玉楼の建つていた本陣の礎石出崎式礎石の上に立ったとき、現在日本でも珍らしく僅かに残っているこの礎石の上に建つていた太い中柱と建築物を想像しまゝ、千三百年前の昔に思いを走せたのでした。又その近くの方形墳、前方後円墳の中に石棺が露出している昔の姿を今に見て、思ひは種々の歴史の跡を辿るのでした。汽車の窓、自動車の窓から何ともなく眺めた寺や唯美しい山と思つていた松山が大きい古墳であつたりして言い知れぬなつかしさを覚えたのでした。

⑩
車は一路、加古川市天台宗鶴林寺へ走りました。門を入ると公園のように美しく広い寺の境内に幾棟ともわからぬ堂塔伽藍の建つ中に一際目立つ五重塔、流石に播法隆寺と称するのもうべなるかなと感心させられた。本堂、太子堂、常行堂、鐘樓、行者堂、護摩堂等を鳥田先生が詳細に御説明、今まで知らなかつた建物についての知識を得て、柱一本によつてその建物の年代を若干知ることが出来るようになったり、又古い建物についての懐しみを覚えるようになりました。この寺の住職が安師出身の吉田さんと言つて山崎町長さんから前もつて連絡しまゝ下さつていたので便宜をはかつてもらい、すべてが大変好都合であつた。鶴林寺を出た頃から雨となり、豪雨沛然と降る中を水しぶきを立て、アスファルト国道を東進、この道すがら由緒あるところ悉く鳥田先生の御説明、バスガールのあけみちゃんも今日はお勉強だと耳をすまます。須ヶ寺について雨は止んだ。ここでも又手の変わった面について、また鶴林寺と似た点、柱の面とリを見て一寸斬したこと、鳥田先生の話とあつていた。弁慶が金棒の先に引っかけた登つたという鐘、今の人にはとて手合わなないであろう。この鐘に秘められた多くの歴史伝説等を聞きつゝ、この寺を辞し、レクレーションとして水族館にゆく。御保川に住む點をさも珍らしそうに眺めたり

海の魚を硝子ごしに眺めては喜び、熟帯魚には特に興味を持った。

帰途のバスは思い／＼の喉自慢やら、隠し芸に花を咲かせ、破れ世帯を忘れてみんなはしやいで夕方帰りました。迷信か何か知らないが流石に寺や宮を研究してまわる私等は精進のよいものばかり、この日一日はよい天気で雨は降ったが車中のときばかり。車が止まれば雨又止む。かなり趣味もなく縁遠い古寺のすすけたところが何となく懐しくなつて来しました。

会員名簿 (二)

西新町	前野 善吉	鴻ノ町	志水 浩一郎
〃	伊藤 忠	〃	常陰 雅弘
本町	塚本 長次郎	中麻次	稲田 耕哉
山田町	島津 統一	〃	青柳 徳太郎
伊沢町	杉本 橋治	東寛次	山本 久治
〃	鳥居 勇治	〃	本城 あや子
出水町	安井 松二郎	土 万	井口 憲一
北魚町	赤松 円裕	菅 野	井上 末一
今宿	田淵 四郎	葛 次	宗平 亮

『実栗郡誌』 発刊

本会と西播史談会との協力でようやく印刷ができました。片岡醇徳が宝永五年（二百五十年前）著したもので、今日まで写本が伝わり未刊本であったのを、島田清先生の序文をつけて初めて世に出たもの。希望者は山崎敬委内本会まで申込み下さい。（頒価実費七〇円）

会員募集

皆様の御援助により本会も順調に発展してはいますが地区によつて未加入の方が相当ありますから、此際御入会をお願いします。会費は年額百円。本会又は最寄り役員まで申込み下さい。

呉服とふとん

高野真商店

東和通
電話 一三〇番

消息

春季見学会 前号予告のとおり六月八日、姫路市の国分寺より神戸市の須ノ寺まで各地の古蹟社寺を实地見学、島田清先生の説明で充分満足して頂きました。参加人員七十名。

大和文化講座 会員志水富次、池田平市の両氏は、奈良県教育委員会主催の文化講座に出席。同地の古美術等を实地見学。八月七日から十一日迄受講された。

山高地歴班 城下町として発達した山崎町の武家屋敷の研究を初め、鹿沢の横井、岡橋、菅江、八田、武向、竹中、富和、橋本、元山崎の鶴野の各家について順次調査予定である。家屋敷の調査と共に、兵法書類、武具等の研究もあわせて行うことであるから、その成果が期待される。

郡内史料探訪 山崎高校宇野先生は夏期休暇を利用して、郡北奥地を遍歴され、貴重な資料の発見調査をされた。その一端を本会報に寄稿されているが、資料整理を待つて第二報告を待たれる。資料は調査を

待っているのであるから、有志の方々の未発見資料の発掘を期待される。

前野道素翁歌碑 山崎町最上山の登り道に於て銅像があつたあとに、今坂田友施会によつて同翁のいろは教之歌の一つ「地理をしらべよ世界の地理を鳥嶮根性をやめにして」という一句を銅板に刻して、碑石にはめこんで建設される。中年の山崎町の方には馴染のものです。毎年木版刷りの絵入り歌を一枚ずつもらった記憶がある筈である。文化運動に、町政に相当貢献した善次郎翁の顕彰には意義がある企てである。

おとがき

次回会報原稿締切りは十一月三十日と致します。郡内の郷土ニュース等、早目に御通知下さい。各地の碑石、墓碑等、世に知られないものが相当あるのではないかと思います。御投稿を期待します。

洋品 雑貨 紳士服

東和通 電話一四二番

洋品部